

選考委員に聞く 冒険賞に対する思い

植村直己冒険賞の選考は、創設当時から、国内でも特に冒険界に精通している石毛直道さん(国立民族学博物館名誉教授)、河合雅雄さん(兵庫県立人と自然の博物館名誉館長)、椎名 誠さん(作家)、西木正明さん(作家)の4人をお願いしています。

国内、世界を舞台にして人間の可能性に挑んだ創造的で勇気ある日本人の冒険行が対象となりますが、毎年、その数は100以上にも及び、その中から白熱した議論を通して受賞者が決定されます。

審査委員の皆さんに、この冒険賞に対する思いをお聞きしました。

日本で唯一の冒険賞



石毛直道さん

国立民族学博物館名誉教授。専攻は民俗学。ニューギニア、タンザニア、リビア、東南アジア各地などで現地調査に従事。著書は『食生活を探検する』『リビア砂漠探検記』など

冒険をしたからといって、世のため、人のために役立つことはほとんどない。冒険は誰かのためにするのではなく、自分の可能性を確かめることです。それでも、偉大な冒険は人々に勇気を与えてくれます。

冒険には危険が伴います。そこで、日本のお役所は冒険を目の敵にするのが普通です。おとなく暮らしていたらいいのに「何の役にも立たない無謀なことをして、遭難でもしたら尻ぬぐいをさせられるのはかなわない」というのが管理する側の言い分です。

旧日高町が生んだ世界的冒険家を記念し、植村直己冒険館を建設し、日本で唯一の冒険賞を設定しました。冒険嫌いの行政としては異色なことですが、それを新しくなった豊岡市が引き継いでくださったことを、心から喜んでいきます。

冒険に理解を持つ豊岡市で育った子どもたちの中から、第二の植村直己が出ることを期待いたします。

日本人を勇気づける気高い賞



椎名 誠さん

作家。著作は私小説をはじめ、SF作品、エッセイ、ルポ、写真集、絵本作品、対談集との多岐に渡る。探検・冒険もの著作も多い。代表作は『犬系譜』『アド・バード』など

日本人として世界に誇れる人物を一人挙げると言われたら、ぼくは躊躇なく「植村直己さんです」と答えます。これは今でも変わりません。いや、年ごとにその思いは募ってきます。世界のいろいろな場所を旅しているとその国、その土地の人から植村さんのことについて聞かれることがあります。そのたびにその質問に答えることを誇りに思っています。

この植村直己冒険賞の選考委員をさせてもらうことは何よりも名誉なことだと思っています。第一回目から植村さんのスピリットに迫るさまざまな冒険をなし遂げた人を、この賞のもとに新たに世に送り出せる仕事をしてきたこともまた誇りに思っています。こうした賞は今の日本には他になく、このように歴史を積み重ねて行けることに選考委員として感謝しています。

日本人を勇気づける気高い賞として、新しい冒険者がさらにたくさん誕生することを願っています。

植村直己冒険賞

歴代受賞者

(敬称略)

*氏名下の()内は誕生日と在住地

第4回(1999年)

大場満郎

(1953年、山形県)



史上初めて北極海と南極大陸を単独徒歩横断に成功

第3回(1998年)

関野吉晴

(1949年、東京都)



人類拡散の歴史を人力で逆方向に踏破する約5万kmの旅に挑戦

第2回(1997年)

米子昭男

(1952年、大阪府)



左腕を失うハンディを乗り越えヨットで大西洋・太平洋単独横断

第1回(1996年)

尾崎 隆

(1952年、三重県)



幻の山ミャンマー最高峰カカボラジ(5881m)を初登頂



植村直己プロフィール

1941年、日高町上郷に7人兄弟の末っ子として生まれる。19歳のとき、明治大学山岳部への入部をきっかけに冒険の世界へ突入。その後、犬ゾリによる北極点単独到達、北極圏1万2000km犬ゾリ単独走破、世界最高峰のエベレストをはじめとする5大陸最高峰の登頂など、世界の冒険史上に残る数々の偉業を成し遂げる。1984年2月12日、世界初のマッキンリー冬期単独登頂に成功、翌13日飛行機との交信を最後に消息を絶ち、帰らぬ人となる。同年に国民栄誉賞を受賞。

植村さんから創造の喜びを学ぶ



河合雅雄さん

立入と自然の博物館名誉館長。専門は人類学、生態学。霊長類の進化を研究し、アフリカ行は20回を超す。著書は『ゴリラ探検記』『小さな博物館』など

豊岡市が生んだ偉大な冒険家・植村直己さんは、豊岡市の誇りであるとともに兵庫県の誇りです。そして、日本が世界に誇れる人の一人です。

先進国では、冒険家は社会から称賛され高い評価を受けています。しかし我が国では、冒険に対する理解がまだ十分ではなく、冒険賞も植村直己冒険賞ただ一つしかありません。

冒険は未知の世界を拓いていく原動力です。ともすれば、子どもたちは物あふれと飽食のぬるま湯にひたり、夢と希望を失いがちです。夢のある未来へ挑戦し創造の喜びを知ることが、植村先輩から学んでゆきたいと思えます。

今、豊岡市は壮大な冒険に挑戦中です。絶滅したコウノトリの野生復帰という、世界でも稀な大事業です。冒険者はこれに関わるすべての人と、コウノトリ自身です。先日、福井県から大阪府まで飛翔した一羽がいましたね。大冒険です。さすがは豊岡生まれ、鳥も植村さんの志を継いでいる、とほほえましく思いました。人も鳥も未来を拓く冒険心を持ったこの地であってこそ、この野生復帰という大事業に挑戦することができたのだと思います。

「直己」の名を守っていくお手伝いを



西木正明さん

作家。13年余り在職した平凡出版(現・マガジンハウス)を退職し、作家活動に入る。代表作は『オホーツク謀報船』『凍れる瞳』『端島の女』『夢幻の山路』など

今年もまた、植村直己さんのことをみんなで見たい、彼の偉大な功績を思い起こして懐かしむ季節がめぐってききました。今年がこれまでと少し違うのは、植村さんの魂が豊岡市民になったことです。今ごろ天国の植村さんは、豊岡市民になった自分についてどう思っておられるのでしょうか。通信手段があつたら、ぜひ聞いてみたいものです。

私が想像するに、彼は、「ほほう、俺もとうとう、市という名のつく自治体の一員になったのか。少しは出世したかな」と、あの人懐っこい笑顔を浮かべているように思います。かつて植村さんと、探検を志した者同士(僭越ながら私は早稲田大学探検部出身です。もちろん業績は雲泥の差ですが)で対談した思い出を持つ者として、ひとしおの感慨を覚えます。これからも豊岡の皆さんと手をたずさえて、世界の冒険家「植村直己」の名を称揚し、守っていくお手伝いをさせていただきます。と願っています。

第9回(2004年)

渡邊玉枝

(1938年、山梨県)



女性世界最高齢で8000m峰5座目となるローツェ(8516m)に登頂

第8回(2003年)

安東浩正

(1970年、神奈川県)



冬期シベリア1万4927m単独自転車横断

第7回(2002年)

山野井泰史・妙子

(1965・1956年、東京都)



ヒマラヤ難峰・ギャチュンカン峰(7952m)の登頂に成功

第6回(2001年)

中山嘉太郎

(1957年、山梨県)



中央アジア・シルクロード走り旅で9400kmを走破

第5回(2000年)

神田道夫

(1950年、埼玉県)



熱気球でヒマラヤ・ナンガパルバット(8125m)越えに成功